

講演三 韓国古代城郭からみた鞠智城

講演者紹介

向井 一雄（むかい かずお）

関西大学経済学部卒業後。

一九九一年から、古代山城研究会を組織、同会代表。
専門は、日本考古学。

・講演三「韓国古代城郭からみた鞠智城」

向井 一雄（古代山城研究会代表）

はじめに

古代山城研究会の向井です。よろしくお願いします。

私は鴨緑江イロハダリョウから南の、韓国の古代のお城についてお話します。最近この二〇年間で非常に発掘調査が進んでおり、もしかすると日本の古代山城よりも韓国の古代山城のほうがよくわかってきているかもしれません。そういう新しい最新の成果を皆さんにご紹介しながら鞠智城との関係を考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

一、韓国における城郭調査の進展

韓国と日本の山城の比較

まず、どういう地形にお城を造るかということで、形式が色々分類されているのですが、これは韓国で一番用いられている分類です。まずはじめは、テメ式と言いまして、韓国語で鉢巻などという意味です。山頂式や鉢巻式というように日本語では訳しています。山頂のところにくると取り巻いているのがわかるかと思えます。次

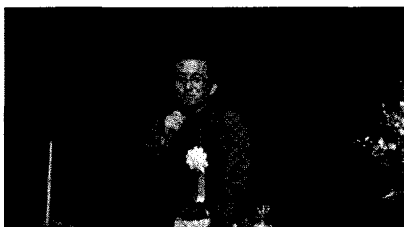


写真 13 向井一雄氏

が、包谷式^{ほうこしき}と言いまして、比較的広い谷を囲い込んで造っています。それから最後に、連峰式^{れんほうしき}と言いまして、日本で言うところの大野城などがそれにあたりますが、いくつもの峰をつなげて造っています。包谷式の大きなものと考えてください。

実際の参考例ですが、これはテーマ式の典型的な例で、百済の最後の都の扶余にあります甌山城^{おうさんじょう}というところですが、山頂のところに石垣がぐるりと、崩れた石垣ですが取り巻いているのがわかると思います。それからこれは北朝鮮にあります黄龍山城^{わうりゅうさんじょう}と言いまして、包谷式山城の典型例です。この城壁は高さが五メートル以上ありますが、こういうのが谷と山を取り巻いています。

そして日本と韓国の山城との比較ですが、一番大きな違いは大きさが全然違うということです。韓国の特に百済地域の山城ですが、比較的大きいものでも、周囲一キロぐらいいしかありません。それにひきかえ、日本の大野城は周囲六・三キロ、それから日本の鹿毛馬城^{しかまばじょう}ですが、こちらはだいたい二キロぐらいいあります。ですから日本の古代山城のほうが全般的に大きいということをまず認識してください。

新羅の山城

韓国のお城ですが、発掘調査が進んで参りますと、ほとんどが六世紀代に新羅が造った城が多いということがわかってきました。伝承では、四世紀や五世紀からこの城があ

つたと言われているところが多いのですが、発掘調査をしてみると、実は六世紀代に新羅が朝鮮半島を統一していくその過程で造られていました。

韓国の慶州ですが、ここが新羅の元々の国、斯蘆^{セロ}国です。ここが新羅の原領域になります。そこから釜山の西に金海^{キムヘ}、『魏志倭人伝』だと「狗邪韓国」という名前で出てくる金官伽耶国を五三二年に併合し、その北にありますのが大伽耶ですが、今、高靈^{コリョ}という町になっています。五六二年に新羅はここを滅ぼして伽耶諸国を完全に併合します。七世紀頃の新羅の領域になりますが、高句麗と百済が争っている間を割って、今のソウル、漢江^{ハンガン}の流域を完全に新羅が抑えてしまいます。これが、新羅が三国を統一する原動力となります。

次に、新羅の三年山城です。五世紀の終わり頃（四七〇年）に造られたと言われています。一キロぐらいの小さな山城なのですが、このような高さ一〇メートルを超えるような、素晴らしい城壁があります。そしてこれは近くの忠州山城の石積みの断面ですが、よく見ていただくとわかりますように、一層、一層、石を井桁に組んでいます。こういう積み方すると崩れません。城壁が崩れると結局内部に侵入されてしまいます。古代の中国軍はローマ軍と同じように、破城槌や攻城塔など、城壁を打ち破る兵器をいっぱい持っていますので、城壁を堅固に造らなければならないということで、こういう城壁を造っているわけです。

それから次は、百済と新羅の城、どの城が百済でどの城が新羅なのかということで、ながらく韓国では論争がありました。今でも完全に決着はついていませんが、例えばこの鷄足山城、ここなどは新羅と百済が互いに取ったり取られたりするものですから、両方の土器が出てきます。どちらの山城なのかよくわからなかったのですが、

どうも最初は新羅が造った山城のようです。それから、姑母山城^{ハムモ}は、三年山城と平面プランがよく似ており、やはり出てきた土器などから新羅の城だと考えられています。

新羅の山城の特徴として、基壇補築というのがなく言われてきました。基壇補築というのは、城壁本体の裾の部分に斜めに補助の石垣をつけたものです。これは版築の城壁でも石垣の城壁でもそうですが、こういう城壁の一番もろい部分というのが城壁の裾の部分になります。雨が当たったり霜の影響を受けたりして、徐々に崩れていきます。そういうことを防ぐために補助的な城壁を造っているようです。基壇補築は百済の地域にはほとんど見られないので、新羅の特徴と言えます。

もうひとつ、新羅の山城の特徴として懸門がありますが、門の入り口が高いところにあって、普通使っている時は、はしごだとかそういうものをつけて使うという形式の門です。これは韓国の古代のお城には非常に多く、例えば温達山城^{ウンダム}、新羅の山城ですけれども、今でもはしごをつけないと上に上がれなくなっています。それから日本の屋嶋城ですが、日本で初めて懸門が確認されました。一・五メートルぐらいしか残っていませんが、二メートルぐらいはあったと思われます。同じような城門が大野城でも見つかりましたし、鬼ノ城もそうだったと考えられています。

高句麗の南進拠点の遺跡

それから、最近の成果としては、高句麗が百済の地域に占領、南進して、拠点をいくつか造っているというこ

とがわかってきました。風納土城というのは、ソウルのオリンピック公園のすぐ近くにありますが、北側の峨嵋山という山に高句麗の小さなお城がたくさん造られています。小さいものだと言いますが五〇メートルぐらいしかありませんし、大きいものでも周囲が二〇〇メートルぐらいしかありません。ですから堡壘と呼んではいますが、こういう峨嵋山堡壘群の発見というのが最近の成果のひとつです。

例えば、峨嵋山の第四堡壘、ここが一番大きい城ですが、馬面があります。中国では馬面と言いますが、韓国では雉城と呼びます馬面が三つぐらいついているところもあります。韓国では、峨嵋山堡壘群のほかに、北朝鮮との国境、臨津江沿いにも高句麗の堡壘群がたくさんあることがわかってきています。峨嵋山の北側に高句麗堡壘群があり、それから臨津江の漣川というところに無等里堡壘群、それから堡壘よりは少し大きいのですが、瓢蘆古壘があります。少し大きいだけでこれも周囲が一キロも二キロもある城ではありません。臨津江の川に沿って川を利用するような形で、三角形の城が造られています。ちょうど二つの川の合流地点を利用して造っています。日本の中世の城でも、こういう場所に造っているところがたくさんあります。無等里の第二堡壘ですが、一番北のほうに雉城があります。こういった雉城ですが、尾根筋から攻めてくる敵だとか、城壁に取りつこうという敵兵に対して、横矢をかける機能を持っています。ここで興味深いのは、石垣作りになる前に木柵の城であったことです。最初、木柵の城であったのが石造りに変えられているというようなことがわかってきています。それから、ここでは馬具のほか鎧が出土したりしています。韓国では「札甲」といいますが、日本では桂甲といっています。小札を連ねて作った鎧で、城の外から出てきました。それから蛇行状鉄器という、最近日本でも埴輪

だとか現物が古墳から出土したりしていますが、高句麗の壁画に書かれた馬冑をつけた馬のように、後ろに、棹飾りみたいなものがついたものが出土しています。

高句麗の南進拠点の中でも最大の遺跡が南城谷遺跡ナムソンゴといい、五世紀の後半頃、忠清北道の清州の近くに造っています。ここでも、木柵が検出されており、それから尾根筋はに四本の空堀が掘られ遮断されています。こういった点は日本の城に少し似ていますが、山城のプランは包谷式です。最大と言っても規模は周囲二キロぐらいです。柵列が二重になっており、外側に雉城がたくさんついています。木柵に土塀のようなものをつけて、トンネル状の構造になっていたのではないかとというように復元されています。

もうひとつの南進拠点ですが、今の南城谷よりも、もう少し南に行ったところに、月坪洞ウヤルビョンドンという遺跡があります。月坪洞の遺跡自体は最初に木柵の城ができて、その後、石築と柵を組み合わせた城になって、最後に新羅によって、一番北に月坪洞山城という石築の城が造られています。

百済の城郭

韓国の山城、城郭のルーツとしては、高句麗もありますが、百済地域に関していうと、楽浪郡治があります。北朝鮮の首都・平壤、平壤に楽浪郡がありました。卑弥呼の使者も行ったところですが、六〇〇メートル四方の土城が楽浪郡地の跡です。二世紀から三世紀頃の楽浪郡時代は平地の城になります。中国の城が、半島のこうした地域に分布しています。ですから、そこから南側は韓族など、中国の植民地化されていない地域ということに

なりますが、中国式の城の影響を受けていました。

風納土城というのは、峨嵋山堡壘群の南にあった百済の都の城ですが、その土塁は、中心部に芯になる版築の土塁を造って、その両サイドに版築層を少しずつ増やしていくというような造り方をしています。これは独特な土塁の造り方なので、最近同じような造り方の土塁が、韓国で何箇所も見つかりはじめました。四世紀から五世紀代ぐらいの百済の領域では、こういった平地か、低い山に、土の城が作られていたことが徐々にわかってきます。

では、新羅のほうはどうかと言うと、まだ五世紀代は立派な山城は造られていません。慶州の月城、半月城とも言いますが、ちよつとした丘陵上に城壁を巡らせており、瞻星台が少し北のほうにあります。この時代は、この月城が王宮で、南山に二つの小さな山城というか丘城があつて、攻撃を受けた時の避難用に使っていたようです。それから、日本の都と同様、新羅は統一新羅になつてからも都の周囲に城壁を造っていません。

さて、先程、百済の城か新羅の城か、なかなかわからないというお話をしましたが、ようやく百済の土器しか出てこない、百済の瓦しか出てこないという山城が一つ見つかりました。栢嶺山城と言いますが、これは百済と新羅の国境沿いにたくさんある小さな城のひとつです。発掘してみると、百済時代の七世紀前半の遺物しか出てこないのです、その後再利用されてないようです。周囲二〇メートルぐらいの規模で非常に小さい城ですが、門が二箇所、雉城が一箇所、それから木櫓庫（もくろく）というおそらく貯水池だと思われしますが、それが城の中心部に造られています。南門跡では、門の角のところが少し丸みを帯びています。また、先ほど木櫓庫と言った貯水施設の上

には屋根をつけていたようです。木槨庫は、最近、韓国でたくさん見つかるようになっていますが、これは比較的小さいものになります。この城が見つかったことによって、今まで百済時代なのかそれとも統一新羅時代なのか、よくわからなかった城の年代を知る手がかりとなりました。

扶余の南にある聖興山城では、栢嶺山城と同様、門の城外側に出るところ、袖石垣のところが丸くなっています。それから両側の袖石垣の間は少し抜け落ちて壊れていますが、懸門に近い構造と考えられます。懸門に関しては、新羅に多いと言われてきましたが、百済地域でも聖興山城や、先程の栢嶺山城でも見つかっています。

そしてもう一つ、やはり扶余のすぐ近くですが、論山^{ノンサン}というところに魯城山城城があります。それほど大きな城ではありませんが、長方形の比較的整った石を使っています。ここも城門の角のところが丸くなっています。聖興山城、栢嶺山城もそうですが、七世紀の前半頃の百済の城の石垣というのが、こういうものだということが少しわかってきました。

聖興山城に関しては、新城と古城というのがあり、新城の石垣と比べて、古城のほうは、少し雑な石垣です。この城は、加林城^{カリン}という城名がわかっており、百済が扶余に遷都してくる前に、この加林城を造ったという記事があります。これは五〇一年のことで、六世紀の初め頃に古城のほうを造って、それから七世紀に入る頃、新城のほうを造っているということがわかってきました。同じように、蛇山城^{ササン}では古城のほうが百済時代に造ったもので、新城のほうが新羅になってから造られたようです。それから扶余の南のほうに辺山半島^{ピョンサン}と言って竹幕洞^{チムバクドン}という、日本の沖ノ島とよく似た祭祀遺跡があるので有名な半島があります。その辺山半島の南側に茁浦^{チムポ}という港

がありますが、そこに古阜キムツツノの旧邑城キウイシヨウという城があります。高麗から朝鮮王朝時代のものと思われるのですが、発掘してみると、その下から百濟時代の城が出てきました。その北門でも角が丸くなった石垣が見つかっています。まだ積極的に言っている方はいないですが、私はここが白村江の戦いの時の周留城の有力な候補地ではないかと思っています。標高は一〇〇メートルぐらいの山ですが、港に面するようなどころに立地しており、百濟時代の、古沙夫里コッサフリという地方行政機関、百濟には五方制というのがあったのですが、地方統治の拠点だったところです。こういう城があるということで、今後注目されてくると思います。

伽耶の山城

さて、鞠智城との関連では、伽耶ハヤの咸安ハムアン、『日本書紀』では「安羅国」といって、任那の復興会議で登場するところですが、そこに新羅が造った城山城があります。その城から、多量の本簡が出土しています。本簡だけで一冊の報告書ができるぐらいの量になります。韓国では、最近本簡の発掘が進んでいて、仁川の桂陽山城からは論語の本簡なども出土しています。今後、日本も古代山城の城内で貯水池跡のような湿地帯みたいなところを発掘すると、貴重な文字資料等が出てくるのではないかと期待しています。

伽耶地域も城郭の実態がよくわかっていなかったのですが、最近、発掘が始まっています。これは釜山近くの金海、金官伽耶国のあったところですが、首露王ボロという王様の王陵の南側に、鳳凰台という小高い丘があります。そこに市街地がどんどん広がってきたのですが、道路工事の時に発掘が行われ、A地点のところから、幅が二〇

メートルぐらいある城壁が見つかりました。両サイドを石垣で作って、中は版築しているという構造で、鳳凰台の周りを部分的に発掘していくと、ぐるりと囲んでいるということがわかってきました。伽耶の王宮は、日本では言うところと平山城みたいなイメージのものが多羅國のあった陝川(ハナダリ)でも出てきていますので、ようやく一端がわかってきたかなという感じです。

これも金海ですが、良洞山城(ヤンドン)というところで、ここも伽耶の山城ではないか、ということでも話題になったのですが、おもしろいことに、城門の角のところが丸くなっていて、基壇補築もあります。新羅の特徴と百濟の特徴と両方持っているという、伽耶の山城ならではのもので、両方の勢力から築城技術を学んでいるのかもしれない。

次に、大伽耶の都、高靈(サム)の主山城です。昨年の発掘調査によって大規模な石垣が出てきて、基壇補築があります。伽耶地域の研究者は、大伽耶が造ったのだと言われていますが、築城時期は六世紀頃だと思いますが、本当に大伽耶が造ったのかなと思っています。城壁の内部から小さな石積みが出ていることから、最初に小さな城を造ったのが大伽耶で、その後、新羅が入ってきて大規模に改築しているのではないかと想像しています。

列石について

それからもうひとつ、日本の神籠石と呼ばれる山城に列石がありますが、列石について、韓国では基壇石という言い方をします。基壇石の出現時期に関して、いろいろと議論があったのですが、最近ではかなり新しいだろ

うという結論が出つつあります。神衿城^{シノグム}、木川土城^{モカチヨ}、釜山の近くの華山里土城^{フアサシ}、會津土城^{ヘシ}で列石がみられますが、時期的には九世紀ぐらいに造り始められるということがわかってきています。神衿城では、柱を立てたえぐれが見つかっていますが、この柱の間隔がたいへん重要で、扶蘇山城などでは、一・二〜一・八メートルぐらいですが、統一新羅時代になると三メートルぐらいになり、それが高麗時代になると三・五メートルから四メートルと、だんだん柱の間隔が広がっていきます。日本の城の場合、一・六メートルから一・八メートルぐらいの幅の狭いものがあります。鞠智城、大野城などがそうですが、三メートルぐらいになっているタイプというのは、神籠石系の城に多くあります。もうひとつの特徴は、木川土城のように、列石が同じ向きではなく、階段式に上がっており、こちらのほうが新しいということがわかっています。木川土城のような階段式に上がっていくようなタイプは、日本にはありません。

また、城壁の内部に立っている柱の横に穴が空いているのは横木と言いまして、木と木の間を木でつないだような痕があります。また、外側に石垣を造って上に柱を間に立てているところもあります。列石の下が飛び出しているのが特徴ですが、大宰府の近くで見つかった阿志岐山城に類例があります。また、敷石があり、柱の下に礎石みたいなものがあるのも、日本とは違います。

もうひとつ、蛇山城ですが、列石の前に盛土があります。鞠智城の深迫門のところで、土塁の前に敷石があり、上にやはり盛土があります。鬼ノ城の場合、敷石を露出させて復元していますが、本当はこのような盛土があったのではないかと私は考えています。中国の例ですが、「護城坡」と言って、本体の土塁の外側にそれを守る

土、盛土をするようになっていきます。

二、韓国古代城郭と鞠智城

韓国の古代城郭における最近の成果をもとに、三国時代から統一新羅時代、高麗時代と、韓国の城郭がどういうふうに変わっていくかということですが、最初は山頂式山城の小規模なものしかないのですが、それが統一新羅になる頃に大規模化していきます。そしてそれが一方では軍事的な、非常に峻しい山岳に位置するようなものになります。もう一方は韓国では古邑城と言っていますが、行政の拠点的な城で、丘城みたいなものになります。

山岳城のひとつ、春川チンソンの三岳山城ですが、冬のソナタのロケ地で有名な南怡島ナムイソムの近くにあり、非常に高い山に大規模な城を二つ造っています。もうひとつは、華城フヤンです。一九世紀に築城された城郭都市で世界遺産になっていますが、邑城と山城のいいところを両方併せ持っています。

百済と新羅の山城の配置ですが、百済のほうは小さい城をたくさん造りますが、新羅のほうは比較的大きい城を点々と造っていきます。日本が西日本に築城した時、参考にしたのはおそらく高句麗だと思います。どこまで真似できたかわかりませんが、隋、唐の侵攻を何度も防ぎ止めていましたので、高句麗の防衛網を意識していたと思います。有明海からの侵攻ということを考えた場合、中国は、何度も山東半島から直接渡ってきて、平壤を落とそうとしましたので、十分有り得たのではないかなと私は思っています。

最後に、最近の事例について報告させていただきます。南漢山城では、統一新羅時代の離宮の跡を発掘したと

ころ、大きな建物が出てきました。桁行五三メートル、梁行一七・五メートルもあるのですが、一七・五メートルというのは、鞠智城の大きな建物の長い方のスパンですから、とても大きな建物であることがわかります。屋根に乗っている瓦もかなり大きく、周りの壁も、とても分厚いものです。それから貯水池ですが、姑母山城で、鞠智城にも似た水路に入っていく導水路みたいなものもあり、先程の木槨庫の巨大なものが出ています。また、寧越の正陽山城という新羅の山城で、平たい板に穴が開いていて、その石がちょうど水門の石にはまるようになっています。機械式の上下に開閉する水門があったということがわかった珍しい例になります。それからこれは日本に関連がある遺物ですが、韓国の中部の望夷山城で、この城も新羅と百済が取り合っているところですが、日本式の短甲が出ています。

以上になります。ご清聴ありがとうございました。